

幼児教育における劇づくりの意義

— 保育内容(人間関係)の観点から —
幼稚園5歳児クラスの劇「あほう村の九助」より

明星大学教育学部教育学科 特任准教授 藤田久美子

Significance of drama making in early childhood education (Practical report)

— From the perspective of childcare content (human relations) —
From the play “Ahomura no Kusuke” in the kindergarten-5-year-old class

Kumiko Fujita

キーワード：5歳児クラス 劇づくり 領域(人間関係)

はじめに

幼稚園教育要領(文部科学省、2017)では、領域「人間関係」で、「ほかの人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を育てる」とある⁽¹⁾。みんなで劇を作り上げる経験をするということが「人間関係」の観点からどのような意義があるかについて明らかにする。私が勤務した幼稚園を研究対象とし、年長クラスの担任に聞き取りを進めながら劇づくりの活動記録を参考にする。対象となるクラスは年中の時に私が教務主任として関わったので子ども、保護者の様子もわかる。

1. 劇づくり実践の背景となるもの

柚木武蔵野幼稚園では3学期に劇遊び、劇づくりに取り組む。

(1) 劇あそび、劇づくりの各学年のねらい(毎年学年会議、職員会議で総括をもとに確認している⁽²⁾)

劇づくりに取り組む理由

子どもは「ごっこ遊び」が好きで、自然に遊べる場所、筋書きがないものを参加している子ども同士で、ある程度の共通理解や想像力で楽しんでいる。これに対して劇遊びは、筋書きを理解し、筋書きに沿って自分を表現することを楽しむ。柚木武蔵野幼稚園では民話など優れた文学作品を骨組みとして、その時代や人間関係の背景を想像し、「自分だったらどうするだろうか?」と考えながら表現を作っていく。劇づくりの中では普段の自分とは違う自分を演じることになる。こうした違う人間を演じることが子どもの想像力を育て、また、客観的に自分を見つめる機会になると考えて取り組んでいる。そして劇づくりを進めることでクラスの子どもたちが仲間の表現を評価し、励まし合い、時には批判しながら関係を深めていくのである。

各学年のねらい

年少の劇あそびのねらいは、「絵本の世界を楽しむ」「役になりきって楽しむ」「仲間とお話のイメージを共有する」。簡単なストーリーで繰り返しを楽しむ劇あそびをする。子どもたちは現実と想像の世界をいたり来たりを楽しみ、なりきる世界をたっぷりと経験する。保育参観として保護者に劇あそびを楽しんで

いる様子を見てもらう。

年中の劇づくりのねらいは、「イメージを共有して作品の世界を理解し、楽しむ」「役割を理解し自分の役を果たそうとする」「劇をつくる体験をする」ということである。まず、仲間とイメージを共有して劇あそびをたっぷり楽しむ。次に、お客さんにみてもらい楽しんでもらうという劇について知る。そして、劇遊びから、劇づくりを体験し、フロア劇として保護者にみてもらう。フロア劇は、演じる子どもは舞台上に上がらず観客と同じフロアで演じる。演じる側の緊張感が和らぐ効果がある。また、子どもの細かい表現、息遣いが届きやすいのである。

年長の劇づくりのねらいは、①「文学の世界を仲間と一緒に共有・体験する」。文学作品は長い時間をかけて練り上げられた確かなものであり、作品の展開に無理がなく何回読んでも新しい発見がある。単純な繰り返しの練習によってつくるのではなく、劇づくりについての理解や見通す力、子ども達の集団の力を存分に活かしながら、子どもたちの発想を集団で練り上げる。そして、自分たちの劇を作る過程で楽しいと実感し、集団で作りに上げることのおもしろさ、劇づくりの楽しさがわかる。②「確かな認識、豊かな言語体験、人間らしい感性を育てる」。自分の役とともに他の場面のこともわかる。理解の仕方には個人差があるが集団で響き合い、わかりあう。新しい言葉を自分のものになりたい、使ってみたいという気持ちを十分に活かす。身体で言葉を獲得し友達と共同で自分の役割を果たしながら取り組む。③「表現する力、演じる力を育てる」。役になりきって演じることを大事にし、演技の上手な子を育てるということではない。作品を読み込み深め、子どもたちが感じたことを引き出し表現することを大事にする。仲間とイメージを共有し劇づくりにとりくむ。観客を意識して舞台上で演じ、保護者にみてもらう。

(2)年長の劇作りで大切にしていること

①劇あそびから劇づくりへ

劇あそびは、劇で楽しむことである。劇づくりは、舞台上で上演するためにまとまった劇を作り上げることである。劇遊びは見ている第3者を意識せず自己表現を楽しむ。劇づくりは見ている観客を意識する。つまり見せることを目指して集団でよりよい舞台を創造する。見てもらうことで観客の反応をもらいそれが演技に反映され、はじめて劇の表現になる。また、劇づくりでは、お互い相手を認め合い励まし合い、問題が起こっても自分たちの力で解決できるような集団が求められる。

②観客を絞ること

ゲネプロの時に、ペアクラスの子どもに見せる。年長の子どもたちは年中の子どもと1対1のペアの関係築いてきた。年長で取り組む合宿の報告をしたりなわとび、コマを教えたり一緒に遊ぶなどをする。関係があるからこそ、劇を見てもらいたくなる。また、劇の本番はクラスの保護者のみである。保護者は子どもたちを理解しその成長を受け止めることができる。子どもたちは保護者に最も見てもらいたいのである。

③劇づくりの流れ

昔話を中心に劇の題材になるような絵本の読み語りをする。子どもたちは面白い場面ではすぐにごっこ遊びを始める。クラスの話し合いで劇の題材を決める。絵本を読み深めテーマや、登場人物の心情をより理解しながら場面ごとのごっこ遊びを楽しむ。いろいろな役を経験し、話し合いで、場面ごとの役を決める。衣装や道具は、子どもたちと作ったり、保護者にも協力してもらう。舞台の使い方、演技方を学び、練習する。子ども同士で見合い、より良い表現を求めあう。ゲネプロではペアクラスの子ども保育者にみてもらい、評価や助言をもらう。そして劇の会では、クラスの保護者のみに公開する。

2. 実践(つばめ1組 年長クラス)

(1) クラスの概要

つばめ1組の様子 男子13名 女子15名 計28名

年中からの持ち上がりのクラスである。支援が必要な子がクラスの3分の1在籍している。その子たちは、集中できる時間が短い。そのため、クラス全体が落ち着かなくなってしまう。支援が必要な子どもの保護者の中には、とても熱心に幼稚園の保育を理解し、熱心に関わろうとする方もいる。支援が必要な子どものなかには、クールダウンができるリソースルームを利用したり、部屋の中にその子だけの空間を用意し、ストレスを和らげながら生活する子もいる。「いろいろな子がいていいんだ」「がまんしないでいい」「思ったこと、感じたことは安心して出していいんだ」ということを大事にして年中は夏秋さん、年長は天野さんが担任をした。

(2) 担任が考える題材

つばめ1組について 担任が受け止めているクラスの姿(職員会議資料)⁽³⁾

合宿、運動会、作品展という取り組みを経て、自分自身と向き合い、仲間の姿を見て、自分や仲間を理解しようとしている。遊びも子どもたち同士で組織し、遊ぶようになってきている。Sけん、ドッチボールなどよく声をかけあっていて大人に頼らなくても遊びが始まり持続している。トラブルが起きると以前は自分たちでは解決できずその場からいなくなってしまうこともあったが、今は自分たちでやりとりをしようとする姿がでてきた。その中でも「失敗したくない」「できない自分は見せたくない」と思っている子どももいる。その子どもたちは、周りの様子を伺い、自分の気持ちを安心して出すことができない。

そんな1組にとってあほう村の世界をダラズになったり、代官のように怒りを爆発してみるなど、思いっきり、普段の自分ではできない表現を体験してほしい。自分ではないものになりきって演じることを楽しんでほしい。自分の世界を広げることにつながると考えるからだ。正解がない表現の世界で「表現するって面白い。楽しい」と感じてほしい。仲間がいるからできる劇、仲間とのつながりの中で求めあいながら劇をつくりあげてほしいと願う。

クラス通信より (担任の劇づくり「あほう村の九助」に取り組む思い)⁽⁴⁾

かしこい九助の知恵を頼りにとんちのきいたやりとりで代官を追い出していくのですが、なぜ、1組にとってこのお話なのか。気持ちを表現できなかつたり、周りを見てから動く姿がある子どもたち。このお話の中で思いっきりダラズになったり代官のように思いっきり感情を出したり……なりきってだすことができたなら「こんな自分もいるんだ」「なんかこんなこともできる自分、いいかも」と新しい自分に会っていきことができるのではないかと考えて担任としてもやりたいと考えていました。同音だが違う意味、そこがわかるということが、大きいのですが、1組ではそれを理解できる子どもたちも多くいます。すぐにはわからない子どももやりながら、友達と響き合いながら理解し楽しめると思います。絵本の読み取りをするうえで、わからない言葉が出てきたら、ていねいに深めていきたいと思えます。おうちで読むときも言葉やお話の内容を理解しているかな? など子どもたちの様子を見ながら一緒に九助の世界を楽しんでいただきたいと思います。

まずはたくさんごっこ遊びをしながら表現の幅を広げて好きなところ好きな役を増やしていけるよう取り組んでいきます。ぜひ取り組みのつぶやきなども教えてください。

題材「あほう村の九助」ぶん おおかわえっせい え ふくだしょうすけ ポプラ社

岡山県の山奥のちっげな村、ひどい山奥なので世の中のことを知らないものばかりで、そこはあほう村と呼ばれていた。そんなあほう村、全く年貢を納めないものだから、お代官が年貢を納めさせようと、調べにやってくることになった。村は大騒ぎになる。そこへ世間のことをよく知っている九助じいさんがやってくる。「まかせておけ、みんなほんまもんのダラズ(ばかもの)になつとりゃええ」

という。そんな言葉を信じて村の衆はへらへらと笑い出し、九助さんに任せることにした。そしてお代官がやってくる。九助と村の衆たちは、ダラズになりきって、お代官を追い返す。題材の面白さは、言葉遊びにつながるところがある。思っきりダラズになれる、威張った代官になれるなど普段の生活ではできない表現を思っきり楽しむことができる。そして権力者を知恵と村人のみんなの力でやっつける痛快さが魅力である。

考察

担任は子ども同士でトラブルを解決しようとしてきたことを成長の姿と捉えている。教師が介入して解決する方が早く済むし、簡単な場合がある。しかし、そうではなく子ども同士のやりとりを積み重ねながら、自分たちだけでも解決できるという達成感や仲間への信頼を築くことを大切にしようと考えている。課題としては周りの様子を伺い、自分の気持ちを安心して出すことができない子どもの存在を挙げている。自分の思いを堂々と表現し、それを周りの子どもたちが受け止めて、評価し合う、これをこの劇を通して体験してほしいと担任は願っている。そのために「あほう村の九助」では「思っきり、普段の自分ではできない表現を体験してほしい。自分ではないものになりきって演じることを楽しんでほしい。」と考えている。

また、保護者に対してクラス通信や懇談会で劇に取り組む意味、題材を選んだ理由、そして子どもたちの成長、協力してほしいことを伝える。そのことで、より子どもと一緒に育てていくという立場に立ってもらおう。取り組みの様子も具体的に伝え、どれだけ大切な経験をしているかを理解にてもらおう。保護者は劇の会当日、これまでの過程を踏まえて子どもの表現を受け止めてもらえるようになる。

(3) 劇作りの実践

題材決め 「あほう村の九助に決まった」通信要約⁽⁵⁾

子どもたちの3学期にやりたいことのひとつは、劇だ。ホールの舞台上で劇をやること・劇というのははじめと終わりがあること・途中でやめない・お客さんに見せるということを改めて確認してから劇の題材決めに入った。「じごくのそうべい」「やまんばのにしき」などあがるなかで、「あほう村の九助」に決まりそうな話し合いの流れ。面白くてやってみたいのは、大根おろし、へらへら笑うところ、鯛を造るところ、床をとれって本当に床を取っちゃうところである。そんななか、ユイが、「裸になるのがいやだから、この話いやだな」と発言。「劇だから本当に裸にならなくてもいいんじゃない？肌色の服を着ればいいんじゃない」と、エリ。「それならいいよ」とユイ。「わたしも久助ちょっといやなの。だってね～あほうなのがいやなの」とイロリ。「劇だよ、お話だよ」とカイ。「そうそう、自分じゃないんだよ」と、ヒロシ。「そうか」とイロリ。普段の自分ならありえないけれど、違う人ならできる、そこが劇の面白さである。

考察

劇の題材決めでは担任は「あほう村の九助」をやらせたいと考えていたが、それを押し付けるわけにはいかず子どもたちの希望を取り上げながら、子どもたちが決めることを大切にしている。面白いところ、やってみたいところが発言としてでてくる。一方では、嫌なところ、心配なところも出てくる。その気持ちに耳を傾けどうしたらいいかを交流することによって、やれるかもしれないという気持ちに変化し、みんなが納得して決定するのである。このようなやり取りを積み上げることで、何か心配なことが出てきたときはみんなで解決すれば何とかなるというクラスの雰囲気をつくることになる。

考察 共通の体験が共感につながる

担任が、実感を持って話の世界を捉えられるようにと考え腐ったミカンを用意しビニール袋に入れて嗅がせる。これは代官に村人が「鯛のお造り」を出すときと称して、畑に埋めた鯛を出す場面の理解につながるためである。私もそのやりとりを見学していた。「ウワッ、何?」「くさ～い」。と鼻をつまむ子どもたち。お話の中の代官が腐った鯛を出されたときのことを想像する。今の子どもたちは腐った物を見たことはほとんどない。大人たちは腐敗したものは処分し、腐ったままの物が子どもの生活の場面に放置されていることはめったにない。腐った物の匂いを嗅ぐという体験が今の子どもたちはとても少ない。

また、大きな大根を用意して子どもの頭の上に乗せ、本当にこれが次々に高い天井から勢よく下りて

きたらどうなるのか、想像をする。「大根。重〜い」「本当にこんなのがたくさん下りてぶつかってきたら痛いよ」など、子どもたちは共通の疑似体験をし、五感で感じ、そのことから、ますますお話の世界をみんな想像し楽しむ。この共通体験をする取り組みが子どもたちの共感を生む。

場面ごとのごっこ遊び、楽しい場面から遊んでみる。通信要約⁽⁶⁾

子どもたちが一番やってみたいところは大根おろしの場面。代官が「大根おろしを出せ」と要求し、村人は天井から紐で吊るした大根を下ろす場面である。大根をロープでくり滑車に通し天井からつるし、それをひっぱっておろす。「お代官さま〜だいこんおろしでござ〜ま〜す。」と言いながら。お代官は、天井から大きな大根が次々に下りてくるのでたまったものではない。頭を抱えて右往左往して「もう大根おろしはたくさんだ〜大根を上げてくれ〜」と悲鳴をあげるのである。大根を実際を下ろす動作と、下で右往左往する動きが子どもたちには魅力のようだった。

アツシは大根おろしの場面を楽しんでいた。しかし、大根おろしの場面以外は「見てる」と言う。「やりたい場面はあるけど、仲良しの子がやっていないとできない」と言う。アツシは仲の良い友達とのつながりの中では大根おろしだけ参加できる。数少ない仲の良い友達との関係では劇遊びに参加できるのだが、他の場面や別の子どもたちとの共演は一切できない。アツシはやってみたいと言う気持ちはあるが、どうしてもできないのだろう。まずは安心した仲間とごっこを始めるのがよいようだ。

役決め 「思ったことは言っているんだよ。みんなで考えよう」

「大根おろし」の場面 通信要約⁽⁷⁾

「大根おろしをする村人は、大人気。3人のところ、やりたい人は大多数。前日の話し合いで他の所に動いてもいいと言っていた、タク。「あのさ〜大根おろしのところ多かったから動いたけれど……やっぱりどうしても大根おろし、やりたい。」涙を流しながらみんなに伝えました。「そうなのか〜」と子どもたち。「なんか、私も泣きそうになるよ〜」「怒れないよね〜」「タクくんの気持ちみんながわかって、どうするかだね。」と担任。この時点でどうしてもやりたい人は6人(タク、カナタ、アツシ、リョウ、ハル、タツト)。誰も譲れません。「じゃあ、全員大根おろしやることにする?」と担任。「やだ〜。多すぎる」「誰かぬけてよ〜」「それでは、誰が大根おろしを上手にやってもらえるか決めることにする?」と担任。「そうだね。オーディションをやることにしよう。」と子どもたち。子どもたちから出た、大根おろしの村人は、「大きな声でできる」「笑わないでできる」「ふざけない人」「お代官に『大根を上げてくれ〜』と言われたら、お話のようにあげられる人。勝手にやらない人」ということだ。それぞれ実演した。「声がよかったよ。」「村人っぽい」「笑っちゃってたな〜」「言葉が聞こえなかったな〜」と感想がでた。タクは「なんて言っているかわからない。言えない。」と固まり、オーディション後「やっぱり、長頭にする」とつぶやいた。カナタは「言うことわかるけどみんなの前だとドキドキして言えない。」と涙が出てきてしまった。担任と個別に話をして「大根おろしの村人はやめて他の場面にする」とみんなに伝えた。「アツシもさ〜声が出てよかった」とハルコ。「リョウ、笑わなければいいんだけどね。言葉ちゃんと言えてたよ。」「ハル、言葉、あまりでていなかったけれど声が大きくてよかった。」など感想を出し合い、やってほしい人に手を挙げた。結果、「タツト、アツシ、ハルの3人に決まった。」「リョウはいいの?」とイロリ。「うん……いいよ。もうぼくやらない。何にもやらない……」と気持ちがごちゃごちゃになってしまった様子。しばらく落ち着いてから、「自分でできるところをさがす。」と話してくれた。

考察

タクは、はじめ「大根おろし」を希望していたが、人数が多かったので一度は「他の役でもいい」と納得した。しかし、一晩考えた末、「やっぱり大根おろしをやりたい」と涙を流しながら思いを伝えた。タクの言葉を受けて、子どもの中には「私も涙が出ちゃった」とタクの気持ちに共感し、オーディション参加が決まった。一度決めたことの変更は許されないということではなく、それを受け入れてまた話し合うことのできるクラスの関係ができていく。結果的にタクはその役にはなれなかったが、結果を自分なりに受け入れることが出来た。リョウはオーディションで恥ずかしさから笑ってしまい、選ばれなかった。しかし、そんな彼に対しても「リョウはいいの?」と気遣う発言をする子もいる。このように自分たちの劇の

配役を自分たちで納得するよう、主体的に取り組む姿が見られる。オーディションはこのクラスでは年中の劇でもやりたい役の希望者が定数を超えると、子どもたち全員の前で演じ、誰がよかったかなど話し合いをして決めてきた。年長の役決めではこうした経験の積み重ねが生きていることがわかる。

「床をとれ」の場面 通信要約^⑧

代官役は、ショウに決まりかけたとき、「やっぱり、代官やりたい。」とアカリ。ショウとアカリでオーディションをすることになった。代官らしく、怖い顔を作って「はよう床をとれ！」と大きい声で、ショウ。少し恥じらい気味だがとても大きく強い声で「はよう、床をとれ！」とアカリ。(これは……どちらにもやってほしい……と担任の心。)[ショウがいい]と、カイ。「どんなところがよかったか、そこを言って」と担任。「顔、ショウの顔が良かった。代官っぽい。」「目がすごくよかった。かっこいい。」とヒロシ。「怒っている感じが良かった」とはるき。「アカリの言い方が良かった。」「ショウはさ～、全然笑わなくて良かった。アカリは笑ちゃってた。でも笑っていなければどっちでもいいんだよなあ。」とイロリ。「ぼく、選べない。どっちもよかったから。」とカナタ。どっちでもいい……。それでは決まらない。どちらにやってほしいか、聞いてみた。ショウ13人、アカリ9人。多い方に決めるのでいいか問うと、「多数決はさあ～やっぱりなあ～って後からなるからさ～そういうのはなあ～。多数決はやめようよ。」とヒロシ。「そうだね～」と考える子どもたち。「多数決でもいいと思うけど。」とケイタ。「でもアカリもやりたいんでしょ」とヒロシ。アカリに思いを聞く担任。「二人ともとてもいいと思うけど、ショウがいいと思う人が多くて、だからショウでいいと思うのか、でも、アカリはやりたいと思うのか、アカリの気持ち、今はどう？」少し考えるアカリ。「やりたい。」今日はこちらまでということで話し合いは、保留とし、翌日に持ち越した。そして、「ハダケエの村人にかえる」とショウ。「やりたい」とアカリ。アカリに決まった。

考察 多数決って……発言したヒロシ

2学期の動物園づくりで、園内の地面の作り方をどうするかを話し合った。ヒロシは「土がいい。転んでもいたくないから、芝生はチクチクする。」と発言。多くの意見は「芝生がいい。素敵」ということだった。ヒロシは、多数の意見が出たことで芝生に譲った。しかしあまり納得していないようだった。今回の役決めで「多数決はさあ～やっぱりなあ～って後からなるからさ～そういうのはなあ～。多数決はやめようよ。」との発言は動物園作りの経験に起因する。ヒロシはアカリもあの時の自分と同じ思いをすることになる、と考えて多数決に対して発言することができたのではないか。仲間を気遣う姿が見られた。また、ヒロシの意見に耳を傾けることがあたりまえにできるクラスに育ってきていることが見えてきた。その根底には、担任がヒロシやその他の子どもの眩きに耳を傾ける姿勢があるということが重要である。

役決めの時「多数決はちょっと……」とヒロシの発言から子どもたちは考える。多数決で決めるということは数が多い方に決まるということではっきりし、時間もかからない。しかし、本当にみんなが納得したということになるのだろうかということを考えさせられる発言である。ヒロシは多数決によって物事を決めると、少数派の子どもの気持ちを考えるとかわいそうになるということを言いたいのかもしれない。民主主義の進め方で多数決という方法を採用することはあるが、少数の意見を尊重することを大切にしたい、と幼児ながらに訴えているように思える。

この発言が出てくる背景としては今までの活動での取り組みの話し合いで、「自分の考えが言える」「聞いてもらえる」「受け止めてもらえる」とそれぞれの子どもたちが自由に安心して発言できるクラス作りができていくことがわかる。一方で誰もが「納得する方法をみんなで考える」ということを大切に取り組んできたことも伺える。

仲間のなかで気持ちを出し合い仲間に背中を押されて 通信要約^⑨

火曜日……朝から元気のなかったカイ。「疲れちゃった」と園庭を見ながらぼんやりとつぶやいた。朝の会で「今日、カイ、元気ないよね。」「なんか心配事とか、嫌なことがあるとかかな?」とカイのことが話題になった。「実はさ～、イロリもお家でお母さんと話したことがあって」とイロリがつぶやき始めた。「劇やるときさ～なんか大根おろしのところじゃなくて違うところの九助にすれば良かったな～って思ったんだ……」「え～?なんで?」とびっくりする子どもたち。「なんか、恥ずかしい気持ちが出てきて……」とイロリ。「え～、でもイロリの代官すごくよかったよ。本当の代官みたいで」とユリ。「そうだよ。恥ずかしい感じ、全然しなかったよ。」という声が周りからでて、「う～ん、でもド

キドキしちゃうんだよね。」とイロリ。「でももう、他の役あいてないよ。」とタク。「私、かわろうか。」とユイ。「そうか～イロリちゃん、そういう気持ちで、今、あるんだね。ユイちゃんがかわってくれるって言うけど、かわってもらおう？」と担任。「う～ん。……やめはしないけど……今日、ちょっと頑張ってみる。」とイロリ。「よかった、だってやってほしいもんね。」とほっとする子どもたち。「イロリちゃんのそんな揺れる気持ちをみんなが知って、イロリちゃんは、イロリちゃんが演じる代官をみんながどう見ているかを知って良かったね。」と担任。そんなやりとりを聞いていたカイ。「そうか、そうなんだ」と共感している様子。仲間に背中を押され自分でやると決めたことが表現につながるということだと思ふ。その後、ホールの舞台上で練習。気持ちが吹っ切れたのか、部屋でごっこ遊びをしている時のように大きく動き表現した。「ほら、やっぱりイロリの代官めっちゃいい。怒るところがいい」と見ている子どもたち。「なんか、自信になった。楽しい」とイロリ。友だちからの評価が子どもの気持ちを変えるのである。カイもドキドキや恥ずかしさ、緊張感をたくさん感じているようだが、九助になって話の世界に入りこんでいる。「カイ、前より声が大きくなってすごくいいよ」と友達に言われ表情がすごく柔らかくなってきた。

考察

カイの眩きをイロリやその他の子どもたちが引き取って、自分の経験や考えと重ねて発言する姿が見られた。劇作りという共通の課題に向かって、緊張したり、悩んだりすることを互いに口に出し合うことができている。このような共感し合う関係が自然な形で築けているのは普段の生活の中で、自分の悩みや弱さを出していいんだよ、という教師の眼差しがあるからだろう。

一人じゃない仲間を感じて 担任(天野さん)聞き取り

劇の取り組みが始まったころから幼稚園に行き渋りが始まったカナタ。年中の劇の取り組みではとても張り切ってとりくみ伸び伸びと自分の表現をしていたのに。まわりがみえ始め、自分に自信が持てなくなってきたからなのかと、母とも話していた。大根おろしのオーディションに挑戦したものの、やっぱり他の役にすると、考え中だったカナタ。「鯛を作る村人ならできそう。」と決めた。そして練習に取り組むが、「みんなが見ている前ではすごく怖くてできなさそう」と、担任を通してみんなに伝えた。みんなが見ていないところ、場面のメンバーだけで練習してからならできそうとのこと。カナタにとって、安心して一緒に演じてくれる仲間が必要と感じた担任は、表現力があるショウに、「この場面、どう、やってみる？」と聞くと、「いいよ。やる」と、ショウ。ショウの手をにぎるカナタ。一緒に練習した。台詞や、動きを確認しながら。「言葉言えた」ととても喜ぶカナタ。見ていた子どもたちも拍手。

考察

「自分は〇〇ちゃんよりうまくできない。」と周りの子どもとの比較ができるようになり、自信を無くしてしまふ。これまでの成長の中で自分に向けられる目を子どもたちは「保護してもらえ」「守られている」と感じてきたのだろう。しかし、年長の劇の表現には一定の評価基準が示され、そこに届かない場合は批判されることもある。いつも見守られてばかりの視線だけではなく、評価されるという視線を感じるものがカナタの緊張感になって現れたのではないかと思われる。しかし、そうした視線は「もっとよくなる」という高い要求に基づくものであり、決して人格を傷つけるものではないことにも気付いていてもらいたい。カナタはショウがそばにいてくれるので演技ができた。一人ではできないことも仲間がいるからできる、という思いは子どもの背中を押すことになる。そして、ショウは代官役でアカリに役を譲った子で、周りの子どものことを思いやることのできる子どもである。

保護者の思い

アカリについて 担任(天野さん)聞き取り

話し合いや、友達関係において周りの様子や意見を聞いてから自分の考えをいう。周りにどう思われているかを気にしている。他人の評価が気になる。お店屋さんごっこでリーダーをして取り組んだが、ふりかえると、「疲れちゃった」とつぶやいていた。手ごたえとして感じていないようだった。そ

んなアカリが役決めでオーディションに挑戦し、最後までやりたいとみんなに伝えたとき、担任は感動。練習では声が小さく、自信をなくし、揺れ動く姿も見せた。場面は異なるが同じ代官役の子が声を掛け合って自分たちで練習を始めた。お互いに見合っ、こうしたらもといんじゃない？と助言しあい自分だったらこうやってみる、とやってみせたりするなかで自信をつけた。同じ代官役に取り組む友達と一緒に練習することで友達の表現や助言をとりいれたりして、仲間と一緒にとりくむ楽しさや、仲間への信頼、一緒に頑張っているという一体感がアカリの自信につながったと考える。

アカリの母親からの連絡帳⁽¹⁰⁾

アカリは自分を受け入れられない部分があります。思い描く自分像と実際の自分のギャップをなかなか受け入れられず、「完璧でありたい」「恥ずかしいことはできない」「失敗は許されない」「負けられない」と強く思っています。その気持ちを強く持てば持つほど自信のない弱い自分がどんどん出来上がっていくのでこの強さと弱さの紙一重から抜けられなく日々葛藤しているのがよくわかります。入園してからこの3年間、恐らくこの部分は変わらずにきていたと思います。でも、劇の会を振り返るとこの部分が変化してきたことに気づきました。まず役決めでは多数決で落ちてしまったけれど粘りに粘ってオーディションを受けました。今までなら負ける可能性のあるオーディションなんて受けなかったかもしれないし負けたとなると負けた自分が恥ずかしいという気持ちが勝ってしまい自分からすぐに辞退したはずが、その後も代官役をやりたいという気持ちを変えませんでした。最終的に譲ってもらうことになりました。恥ずかしくて台詞が言えなくて落ち込む日と自分の演技に納得する日を繰り返す日々でした。人と比べて自分のほうができなくて劣等感をもってしまうようなものは、絶対にやりたくないし見られたくないという気持ちが強いので、特に代官役だけのグループ練習は他の代官役と自分を比較してしまい辛かったはず。「アカリちゃん、全然だめだったよう」と先生から来た日もあったので「代官役をやめたい」といつアカリが言い出すかと私はヒヤヒヤしていたのですが、「やめたい」ということはなく、日々一喜一憂しながらも諦めない姿が印象的でした。そして本番前日、「始めの頃の(落ち込んだ)気持ちに戻った」とボソッと言いはじめ、最後に不安な状態で本番に臨むことになりました。本番では私は小声でボソボソ台詞を言う状態を覚悟していたのですが、最初は少し顔がこわばった後は大きな声で堂々と演技をして失敗を恐れるような表情が全くないことに本当に驚かされました。写真撮影のあとにすぐかけよってきて「アカリちゃん、よかった？」と自信たっぷりやり切った気持ちで嬉しそうに聞いてきたことも、こういった行事のあとで初めてかもしれないと私も嬉しくなりました。—後略—

考察

今回担任は、アカリが自分で「やりたい」と自己主張したことに驚き、それなら途中で挫折するかもしれないが、挑戦させてみたいと考えてオーディションに取り組むことを提案した。アカリに手を挙げた子は少数であったが、後日、ショウが譲ったことでアカリが代官役に決まった。これまで自分を出さずにやりたい気持ちを引っ込めてばかりだったアカリにとっては、オーディションに出たこと、最後まで「やりたい」と主張したことで、結果的に選ばれたという山を超えて自信に繋がったのではないかと考える。

3. まとめ 実践から学ぶこと

(1) 幼稚園教育要領、領域「人間関係」との関連

ここで取り上げた実践は幼稚園教育要領の人間関係にある内容では(5)友達と積極的に関りながら喜びや悲しみを共感しあう(6)自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気づく(7)友達のよさに気づき一緒に活動する楽しさを味わう(8)友達と楽しく活動するなかで、共通の目的を見出し、工夫したり協力したりなどするに深くかかわっている⁽¹¹⁾。

とりわけ(5)友達と共感しあうことについては担任が安心して自分の気持ちを言える環境をクラスの土台として築いてきたことで実現できた。一方でアカリのように周りとの関係で自分に自信を持たず、あまり自分の思いを出せない子どもが劇づくりという目標に向かって殻を破ることが出来たことは大きな成果である。他にもカナタのように仲間がいたから表現できた点は高く評価できる。

(2) 仲間と表現を評価し合って劇をつくる

劇作りで大切なことはクラスで一つの物語を作るという共通する目標を持つことが前提になっている。子どもたちは物語の共通するイメージがあることで、多様な役になり切って遊んだり、アドバイスすることができた。「代官みたい」という発言にみられるように、子ども同士がそれぞれの表現を評価し合えた。

一人の子どもがいくつかの役をやること、そして役をやる側だった子が今度は逆に見る側になって仲間の表現を評価する。そのことによって自分の表現を客観的にとらえることができるようになる。とりわけ劇は自分の伝えたいことが見ている人に伝わるかどうかが大変な基準であるから、自分勝手な表現をやるだけではない。

(3) 安心して自分を出せるクラスの仲間に支えられて育ちあう

劇作りが年長の最後に位置付けられている理由は1年間の保育(3年間の保育)のまとめとしての役割を担っていることにある。子どもたちはこれまでの合宿や運動会などの行事や日常生活を通して、ぶつかり合ったり、助け合いながら関係を結んできた。そして互いを理解してきた。劇作りは安心して自分を表現できる関係性の上に成り立つものである。

担任が子どもたちと作り上げてきたことの中に、安心して言いたいことを発言できるクラスづくりがある。自分の考えをクラスの子どもたちの前で発言するにはとても勇気がいることで、「こんなことを言えば馬鹿にされそう」とか、クラスの子どもたちに忤度している場合が幼稚園でも見られる。このクラスでは「多数決でいいのか」との疑問が出された。選ばれなかった仲間の気持ちを想像したための発言に思われるが、相手の気持ちも考えながら、一方では思ったことを自由に発言できる雰囲気がクラスの中に作り出されている。

(4) 見てもらうことでよりいいものになる

自分の演じた役はどうだったか気になる。誉め言葉にはほっとする表情、ちょっと厳しい言葉には落ち込むこともあるが、もっと自分たちの劇を良くしようという前向きにとらえ、意欲につながっていく。子ども同士で演技を見合うのも当然だが、ゲネプロで他学年の子どもたちや保育者にも見てもらい「面白かったよ」「とっても〇〇らしいよ」と褒められたり、「もう少し大きい声で言えるといいね」と助言してもらおう。子どもたちのなかにも大人集団のなかにも受け入れられる関係性があるからこそ、劇はできるのである。

(5) 保護者と共有することが大事

取り組みの過程で起きている子どもたちの様子や保育者の思いを保護者に伝え共有することが大切である。子どもたちが劇をする過程でどれだけ大切な経験をしているのか、どのような子ども同士の関係が生まれているのか今後どうしていこうとしているのかについて懇談会や通信で保護者たちに伝え理解してもらおう。絵本を子どもと一緒に楽しみ、子どもが興味をもったことを一緒に調べてもらう、子どもの話をよく聞いて、葛藤を受け止めてもらい保護者が感じたことも率直に担任に伝えてもらい、一緒に考える。また、道具、壁面、衣装をつくることに協力をしてもらうことにより、劇のとりくみに関心を持ち一緒にくついている気持ちになる。この取り組みにより、劇の会当日は、これまでの過程を踏まえて子どもの表現を受けとめてもらえるようになる。

おわりに

劇の会当日を見学した私は、「お母さんたち、笑ってた!」「楽しかった」「みんなでやったね!」と、劇の会の終了後、子どもたちの感想を聞き、充実感、満足感を大いに感じている様子を目の当たりにした。

先行研究では、小林、岩田(夏)、岩田(育)、米崎(2017)らが「お互いの考えを伝えあう機会を保証し、共通の目的に向かって協力する姿を承認し、意見の対立をできるだけ自分たちで解決するように援助する劇遊びは、領域(人間関係)のねらいを達成するために貴重な体験である。」と指摘するようにこの劇づくりでも示された¹²⁾。また、遠藤、江原、松山、内藤(2009)らが「保護者の前で発表するという性質から、保育者同士、保育者と園児、園児たち、保護者と保育者、保護者と園児などの多様な人間関係において協同的な行為の発達が期待される保育である」と指摘している¹³⁾。この園の劇づくりの取り組みは、まさにそのような協同的な人間関係に支えられ、子どもたちの人間関係を育むものである。

* 学校法人 金子学園 柚木武蔵野幼稚園 2018年度 年長つばめ1組の実践から

* 論文で使用した保護者の文書は学級通信で紹介されたものを園長ならびに担任の承諾を得て引用した。また担任の文書も本人と園長の承諾を得て引用した。

引用文献・資料

- (1) 文部科学省(2017) 幼稚園教育要領、23
- (2) (3) 柚木武蔵野幼稚園 職員会議資料
- (4) (5) (6) (7) (8) (9) つばめ1組クラス通信
- (10) 保護者連絡帳(つばめ1組クラス通信に掲載)
- (11) 前掲(1)
- (12) 小林真・岩田夏実・岩田育代・米崎瑛美(2017) 保育内容(人間関係)の観点から見た劇遊びの意義—富山大学人間発達科学部附属幼稚園における子どもまつりの教育的効果の検討—富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要教育実践研究第12号通巻34号178
- (13) 遠藤晶・江原千絵・松山由美子・内藤真希(2009) 幼児の「表現する過程」を大切にしたい劇づくりの実際 武庫川女子大紀要(人文・社会科学) 57 29

参考文献

- ・柴田泳子(2018) 幼児期における「劇づくり」に関する基礎的研究(1) 札幌大学女子短期大学部紀要, 65, 127-140
- ・利根川彰博(2016) 「協同的な活動としての『劇づくり』における対話—幼稚園5歳児クラスの劇『エルマーの冒険』の事例検討—」『保育学研究』第54巻, 49-60
- ・田川浩三・兵庫保問研編著(2010) 「劇づくりで育つ子どもたち」かもがわ出版